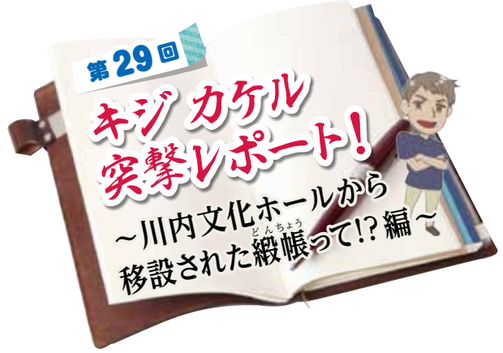

昨春、惜しまれつつ閉館した「川内文化ホール」

その大ホールの顔であった緞帳がこのたび、サンアリーナせんだいのサブアリーナへ移設され、大事に保存されることが決まりました。

移設してまで大事に保存される緞帳って？どういう経緯があったのかな？調べてみよう！

※緞帳：舞台と客席を仕切る厚手の布でできた垂れ幕

開館当時から共に歩んできた緞帳

川内文化ホールは、財政再建団体脱却を機に建設、昭和41年6月に川内市民会館として開館しました。

建設に際し、当時の川内市は本市にゆかりがあり日本抽象画の開拓者として海外でも知られる山口長男氏に大ホールの緞帳デザインを依頼しました。その際に作られたのが、幅19㍍、縦9㍍、重さ750㌔の曲線で構成されたデザインの緞帳です。

山口長男ってどんな人？

▲山口氏イメージ画

山口氏の父親は薩摩川内市（旧川内市）出身であり、山口氏自身の本籍地も本市となっています。

山口氏は明治35年、当時家族が住んでいた現在の大韓民国ソウル特別市で生まれました。中学時代から絵画に親しんだ山口氏は、東京に出て東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）で本格的に絵の勉強を開始します。

その後、昭和2年に東京美術学校を卒業し、その年の秋にはパリに留学して3年余り学び、その才能を開花させていきました。昭和6年に帰国すると、同じ本市出身で以前から交流のあった画家で二科会の創立メンバーでもある有島生馬氏の助力を得て、その年の二科展（※）に出品。早くも入選するなど若くして頭角を現していきます。

戦後、山口氏は、国際的な展覧会で数々の賞を受賞するなど、名実共にわが国抽象絵画の第一人者として活躍します。

昭和29年には武蔵野美術大学の教授にも就任し、多くの優秀な画家を育てました。昭和57年には武蔵野美術学園の学園長に就任し、昭和58年、80歳で亡くなるまで多くの学生を指導しました。

レポートメモ

※二科展とは：美術団体「二科会」主催の二科美術展覧会のことで、秋に開催されており、全国から広く作品を公募するとともに、会員にとっても研さんを重ねた熟成度の高い作品を発表する場とされています。さらに、各主要都市での巡回展も実施しています。（二科会HP参考）

緞帳への思い

山口氏は「総親和と躍進」Ⅰと「総親和と躍進」Ⅱという2枚の原画を製作して市に届け、そのうちの「Ⅰ」が緞帳のデザインとして採用されました。3ページに当時の「広報せんだい」で山口長男氏本人が制作のことばとして語った原文を掲載しています。

▲山口氏が絵付けをした陶器

▲「総親和と躍進」Ⅱ

▲作品

▲水彩画（1）

▲水彩画（2）

▲川内文化ホール大ホールに設置されていた緞帳

皆さんが知りたいことや紹介したいことなどがありましたら、情報をお寄せください。
問合先／本庁広報室広聴広報G（内線634）

山口長男氏どん帳制作のことば

総親和と躍進という市政の願望は現実にはこの地方の動脈であり象徴でもある川内川を無縁にするわけにはいかない。

そこで私はまずこの流れを横線の広がりにし、これに沿う地域の集まりを縦線で区分する構図を考えました。

その結果は川を中心とした市域のふかん図的なものにもなりました。

さらに色を交互に用いて変化を与えたので、直線的な構図とあいまって多少うるさく感じられるかもしれないと懸念しました。

そこでもう一つ広さをもつために曲線の区分を最も単純にして自然観を出そうと考えました。

川内川に沿うて両岸の丘陵は無尽蔵にわき出るような起伏を重ね生きもののように、親しみと躍動を私たちに与えているようです。

ここにも天地の総親和と躍進を見いだします。

これはまたふかん地図のようにも見えますが、海岸を端とした各地域の和合図ということも構想にあったようですので、画題にも添えるのではないかと考えています。

いずれも不じゆうぶんなものでありますが以上の意図が感じられるならば幸と思います。（－原文のまま－）

山口長男氏の作品を味わおう

山口氏の作品を展示している川内まごころ文学館学芸員の財部智美氏は、「一見すると誰にでも簡単に描けてしまいそうな山口氏の作品ですが、しかしそれらは『かたち』を追求し続けた山口氏が、修練を重ねて生み出した形と、精選された「色」とで表現したものです。山口氏の絵を見た禅宗の僧侶が『形があって形がない。これぁ禅の心と一致するのかな…』と感想を述べたという逸話がありますが、単純化された『自由なかたち』で描かれた山口氏の作品には、時間を忘れて見入ってしまうような奥深い魅力があります」と話します。

多くの市民に愛された川内文化ホールへの思いを文化の伝道といった形として残すためにも山口氏の緞帳は保存され、来世へ受け継がれていきます。

この夏にはまごころ文学館で山口氏の作品を一堂に集めた企画展もあるそう。その企画と併せて緞帳を見に行ってみるとより理解が深まって楽しめるかもしれませんね。

ぜひ、皆さんも山口長男氏の芸術文化に触れてみてください。

問合先／本庁文化課文化振興G（内線522－）